

大林太良著

## 『銀河の道 虹の架け橋』

荻原眞子

本書は世界中から集められた銀河と虹についての「資料集成」(コルプス)である。博覧

強記をもつて知られる著者の真骨頂が余すところなく發揮されたこの大部の書物において、

著者が意図したことは、資料集成を行い、そ

れにもとづいて、(一)「銀河や虹についてのさ

まざまな観念や表象が、それぞれ人類文化史

上いかなる地位をしめるか、また民族移動の

ような大きな住民の移動と結びつくものはな

いかという歴史的な諸問題」を明らかにする

こと、(二)銀河や虹について「語られ、伝承さ

れてきた諸表象、諸観念について、どんなシ

ンボリズムがかかわっているかを調べ、それ

らシンボリズムを理解すること」であるとしている。大部ではあるが、本書は読むにはた

いへん楽しく、際限なく興味をそそられ、地

図を傍らにおいておけば、世界のどこへでも

旅行をしながら、さまざまな民族の宇宙と人

間の思いがけないかかわりを垣間見ることが

できること請け合いである。

本書の構成についていえば、第一部は「銀

河の道」、第二部は「虹の架け橋」となってお

り、両部それが東アジア、東南アジア大

陸部 東南アジア島嶼部 オセアニア、北・

中央アジア、北アメリカ、中・南米、南アジ

ア、西アジア、ヨーロッパ、アフリカの十一

章からなっている。第三部は「全体的考察」

であり、これは「分布の大勢」、「銀河と虹の

文化史」、「銀河と虹のシンボリズム」の三章

に分かれている。巻末には図版目録、引用文

献(五十三ページ)と索引がある。第一部と

第二部の各章の最後には「まとめ」がつけら

れて、その章のエッセンスが簡潔に述べられて

いる。大部ではあるが、本書は読むにはた

いへん楽しく、際限なく興味をそそられ、地

図を傍らにおいておけば、世界のどこへでも

旅行をしながら、さまざま民族の宇宙と人

間の思いがけないかかわりを垣間見ることが

通性があることが一目瞭然である。そのよう

な例をここでは紹介してみたい。まず、銀河

について。第一章の冒頭で著者は一般的なこ

ととして、銀河はふつう「川とか道のよう」、

物体として表象され、「金星やスバル星と

違つて人格化されることは少ない」と述べて

いる。さらに、銀河が「天界においていつも

同じ位置にあるのではなく」、季節、時間に

より位置を変え、また、よく見える時とそう

ではない時があるために、「季節の標識」とな

り、「夜間の天体時計として見る民族が少な

くない」としている。

さて、銀河が天の川であるという観念は

「牽牛織女」の七夕起源の説話と結びついて

私たちにはもつともなじみ深いが、中国では

この天上の川は地上の漢水ないし黄河と関連

づけられているらしい。同じことは日本でも

認められ、「万葉集」に七夕の歌が多く收め

られているが、その理由は、「折口信夫が指

摘したように、古代日本には天上の山川と地

田、天の高市が地上にも移されたと論じ、か

か

されている。

州川」であるという。ところで、天上の川と地上の川の対応はインドにも、古代メソポタミアにもある。ヒンズー教徒は銀河の一つの名称として「天なるガンジス川」といい、ヒンズー教の聖典ブーラーナによれば、サガラ王の孫バギーラタが苦行の末、シヴァ神の助力によつて天のガンガーハ河を地上に下ろし、その水でサガラ王の息子たちを蘇生させた。

「地上の聖なるガンジス河と同様天のガンガーハ河は神々によつて大変尊重されており、地上のガンジス河が人間の最悪の罪を洗い流すように、天上のガンガーハ河は天体を清める」。古代メソポタミアにも類似の観念があり、著者は「銀河の二つの支流がおそらく、ユーフラテス河とティグリス河の原型と考えられていたのである」という。また、エジプトには冥界と天界のナイル河についての観念があつたらしいことが推測されている。天上の川・地上の川の対応ではなく、銀河は川であるという観念はもつと広く見られるが、例外としてヨーロッパにはライン河やセーヌ河のような「立派な河川があるのに」、銀河を河とみなす観念がないことに著者は注意を喚起している。

では、ヨーロッパでは銀河はなにか？ 支道」＝「巡礼の道」＝「死者の道」＝「靈魂道」という愉快な表象である。これは中近東配的な道の観念である。その一つは広く盛んである。例えば、サンチャゴ・デ・コンポステラに関する「中世ヨーロッパと現代のウォークロアでは、銀河はそれを辿つて靈魂がサンチャゴ・デ・コント」とするギリシャ神話の説明がある。ところで、現代のルーマニアには「ある天の牧師が自分の乳の手桶をひっくり返してしまい、それが天空に拡がつて銀河になった」とか、ブルガリアには「月や星辰の乳が銀河になった」という説話があり、著者は「あるいは、このような形式の方が、『乳の道』のより古い伝承なのかもしれない」と述べている。ところで、「女神の乳が進つて天の川になった」という説話はブリヤート・モンゴルにもある。著者はこちらは「古典古代のヨーロッパからの影響ではないかと考え、その説明としてソグド人の仲介を想定している。ソグドについてはフランスの民族学者ロット＝ファルク、最近はJ・ベッカーが触れているが、評者もまたユーラシアの諸文化を学ぶ立場から洋の東西の文化交流のなかでソグドの果たした役割を掘り起きてみる必要がある」と考えていて。

ヨーロッパでは、また、銀河を「聖なる道」とする観念が広く盛んである。例えば、サンチャゴ・デ・コンポステラへの巡礼を行う道」であるといふ。この「靈魂の道」という表象は「死者の道」とか「神々の道」として世界にもつとも広く共通して見られる。北米のクリー、ブルックワット、ウインネバゴ、ダコタ、オマハなど平原インディアンでは他界は天上や銀河の端にあり、銀河はそこへの通路と考えられている。このような観念は南米の英領ガイアナのマクシ族、ガイアナのタウリパン族、ペネズエラのパナレ族、アラウカノ、東南アジアのセマ・ナガ族、スマトラ島東南のバンカ島のオラン・ロム族、南インド・デッカン山地、その他、オーストラリアやアフリカの処々にも拾うことができる。しかしながら、著者は第三部において、分布について論ずるにあたり、「死者の魂の辿る道」という観念は特にアメリカ大陸において顕著であるといふ考えに傾いている。

のシリア、ペルシャ、トルコ、バルカン、アーレニニア、カフカスのタタール、南は北アフリカのコプト、モロッコ、アラブ系のベルベル族にまで広く分布している。藁はどうやら馬やラクダに食べさせる刻んだ藁で、これを袋にいれて運んでいるときに、こぼれ落ちて散らばり、銀河になつたというのが「藁の道」の大まかな内容である。「藁泥棒の道」は他人の藁を盗んで、運ぶ途中に大風に吹かれてその藁が空に舞い上がつたとか、その悪行を永久に忘れさせないために天空に痕が残されたのだという。この「盗み」のモチーフをもつアルメニアの伝承について、著者は第三部において、ギリシャのプロメテウスの「火盗み」の神話と関係づける説を紹介し、これに賛意を示している。

もうひとつ、銀河について大きな特徴をなしているのは、これをさまざま生き物にぞらえる観念である。中国の竜、「象の道」(シャム)、ナーガ(インドネシアのミナンカバウ、ニアス島)、「豚の道」(白タイ族)、魚蛇とみなす「虹蛇」である。これは中国の他、ミクロネシア、ポリネシア、大鰐(ギルマレー、オーストラリア、北アジア、中・南北島、鯨(ソシエテ島)、鱗(ハワイ)、米、中部アンデス、グラン・チャコ、中央アーレン(ボリビアのモセテネ族)、ダチョウ(ブラジル)、「水牛の道」(南アジア)、「牛の蠕虫(ボリビアのモセテネ族)、ダチョウ(ブラジル)、「水牛の道」(南アジア)、「牛の

道」(東アフリカ、モロッコ、エジプト)、「雄羊の道」(北アフリカ)、「鳥の道」(バルト海地域)、「雌牛の小径」(オランダ)などである。忘れてならないのは銀河を錦蛇とする表象で、これは虹の表象もある。

銀河についての数多の観念や表象のなかで、虹」という表象は日本を含め、インドシナ、作柄の良し悪し、干魃や豊作、季節の境目などをのかわり、また、天の継ぎ目、天の柱、空の梁などという宇宙構造の説明、さらには天の狩人の足跡(アルタイ、アフリカ)とする伝承は重要である。

第二部の「虹の架け橋」には第一部の「銀河の道」の二倍以上の三七二ページが割かれ、それだけ虹については資料が豊富にあることの表れであろう。そして、日本をはじめ、特に中国では時代によつて、

そのなかで、中部ドイツでは「十九世紀末に、虹はその両端で二つの水域の上に立ち、その一端が二つの大きな金の鉢で水域から水を汲むのだ」という信仰が生きており、表現がヨーロッパに広く見られることは興味深い。

日本をはじめ、特に中国では時代によつて、また、南部の少数民族のもとで多様な表象があることが紹介されている。この東アジアの例を手がかりに世界を逍遙してみて、目にふく共通の重要な観念や表象の一つは虹を竜や河かシユタインバッハ河の上にあるよう見えるときはことに、人々は時々この宝物を探しに行く。虹の鉢は家に幸運をもたらす」という。この表象は日本全国にあるという「虹の下は財宝」という伝承」を連想させる。この伝承は「虹の下の財宝は虹のもたらした贈物だとはつきり言つている例はないらしい」点で、中国やヨーロッパと異なつてゐるという。しかし、日本では古くかれたオーストラリアの例では、「天界の現象

ら虹の立つところには市が立つたことが知られている。

このような吉兆としての虹に対して、一般には虹は人類にとって「不気味なもの」であったと著者は強調する。その理由は虹の自然的な特性に帰せられるが、確かに、虹が「血を飲み」(ベトナムのモン・クメールのスレ族)、「蟹や蛙や胎児を食べ」たり(アッサムのワンチヨ族)、「人をさらう」(ヤクート、カフカズ)といった伝承や観念の他に、虹の表象には不幸な恋、死体化成、病氣や死の予兆、横死、性転換など人生の尋常ならざることにかかわるもののが世界中にある。また、「虹は橋」、「精靈や神靈の道」、「上界と中界の通路」、「天への梯子」という観念や表象も世界に広く認められ、これもまた、天上他界にかかり、「虹を指さしてはならない」というタブーとも結びついている。

このように丹念に集められた資料について、第三部では全体的な考察に基づいて、人類の文化史の再構築、銀河と虹のシンボリズムの解説が試みられる。例えば、銀河が「靈魂の道」であるという観念は人類のアメリカ大陸移住に、虹蛇の表象はニューギニヤからオーストラリアへの移住の時期に比定され、アフ

リカにおける虹蛇はバンゾー語の拡散に関連づけられる。また、シンボリズムについては、虹には不気味さが基調にあり、その根底の靈

魂觀において月や蝶は虹と同じ範疇に含められたという。この議論は本書につづく次作において展開されようとしており、それに期待したい。

サマリーが付されていたらと惜しまれる。七月に刊行されたこの大著は今年度の「毎日出版文化賞」、「福岡アジア文化賞」の栄に輝いたことを付記しておく。

(小学館、八一三頁、七六〇〇円+税)  
(おぎはら・しんこ／千葉大学)

本書のようないテーマを特定した資料集成と

して想起されるのはウノ・ハルヴァーの『シャマニズム—アルタイ系諸民族の世界像』(田中克彦訳、一九七一、三省堂)である。

これは地域を北方ユーラシアに限定してい

るもの、諸民族の世界觀や信仰についての

最初の手がかりを与えてくれる大変貴重な文獻である。ましてや、対象を全世界とし、銀

河や虹、そればかりでなく多様な関心に応えてくれる本書は、神話研究のもつとも信頼で

きる基礎的文獻として計りしれない意義をもつことになろう。巻末の文献目録はざつと見

るところ、四分の三が日本語以外の文獻であ

る。本書が世界で初めての銀河と虹の資料集であるからには、本書を読みたくとも読めない世界の研究者たちはどんなに残念に思うことであろうか。ひとつ苦言を許されるなら、世界に発信すべく、せめて、英文か独文かの